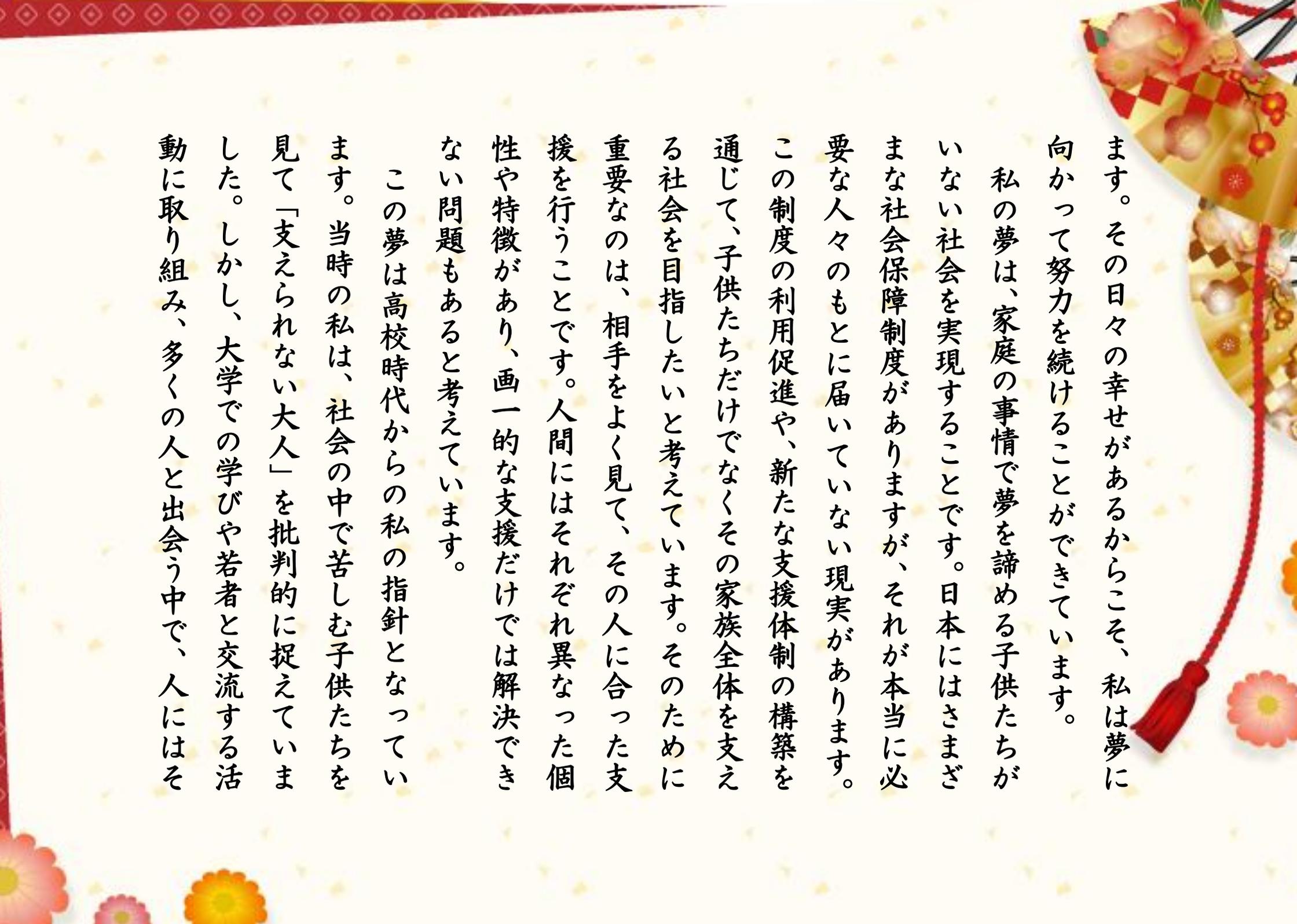


## 「感謝と未来への誓い」

私たちは、コロナ禍という未曾有の状況の中で青春を過ごした世代です。友人と過ごす日々や学校行事、多くの大切な瞬間が制限された経験は、私たちの心に深く刻まれています。それでも、私たちは支え合い、困難を乗り越えてこの「はたちの記念式典」を迎えることができました。この節目に、自分のこれまでの歩みと未来について考える機会を持てたことに感謝します。

私は現在、家計を支えながら大学に通っています。アルバイトや勉強に追われる日々は決して楽ではありません。時には、自身の力ではどうにもならない問題に直面し、辛く感じることもあります。しかし、なぎなたの稽古で後輩たちと共に、精神や技術を高め合うとき、アルバイト先で小さな子供たちが笑顔でご飯を食べている姿を見たりするたびに、日常の中にある小さな幸せを感じ

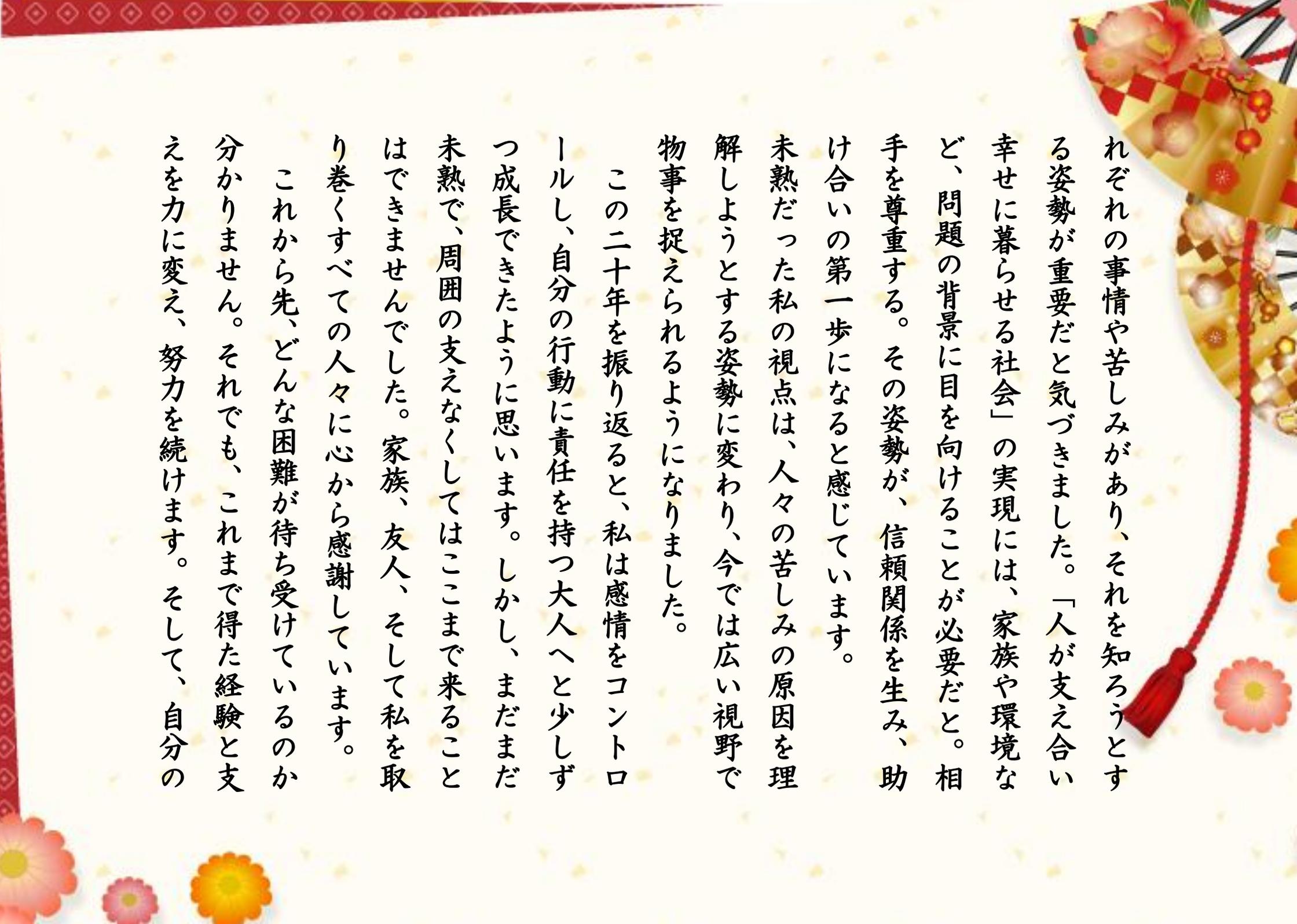


ます。その日々の幸せがあるからこそ、私は夢に向かって努力を続けることができていると思います。

私の夢は、家庭の事情で夢を諦める子供たちがいない社会を実現することです。日本にはさまざまな社会保障制度がありますが、それが本当に必要な人々のもとに届いていない現実があります。

この制度の利用促進や、新たな支援体制の構築を通じて、子供たちだけでなくその家族全体を支える社会を目指したいと考えています。そのために重要なのは、相手をよく見て、その人に合った支援を行うことです。人間にはそれぞれ異なった個性や特徴があり、画一的な支援だけでは解決できない問題もあると考えています。

この夢は高校時代からの私の指針となっています。当時の私は、社会の中で苦しむ子供たちを見て「支えられない大人」を批判的に捉えています。しかし、大学での学びや若者と交流する活動に取り組み、多くの人と出会う中で、人にはそ



れぞれの事情や苦しみがあり、それを知ろうとする姿勢が重要だと気づきました。「人が支え合い幸せに暮らせる社会」の実現には、家族や環境など、問題の背景に目を向けることが必要だと。相手を尊重する。その姿勢が、信頼関係を生み、助け合いの第一歩になると感じています。

未熟だった私の視点は、人々の苦しみの原因を理解しようとする姿勢に変わり、今では広い視野で物事を捉えられるようになりました。

この二十年を振り返ると、私は感情をコントロールし、自分の行動に責任を持つ大人へと少しずつ成長できたように思います。しかし、まだまだ未熟で、周囲の支えなくしてはここまで来ることができませんでした。家族、友人、そして私を取り巻くすべての人々に心から感謝しています。

これから先、どんな困難が待ち受けているのかわかりません。それでも、これまで得た経験と支えを力に変え、努力を続けます。そして、自分の



夢を形にし、次の世代がよりよい未来を描ける社  
会を築いていきたいと思えます。二十歳を迎えた  
私の決意です。